CASE 40
１歳児

のぼって、くぐって、おとしてあそぼ！

協力園
海辺こども園
（臼杵市）

（これまでの経緯）
歩行が始まり、ある程度思うように体が動くようになってきた１歳児。気になるものを見つけたり、触ったりする探索行動が増えてきました。おむつ替えや着替えを待つ時間では、身近にあるブロックをつないだり、外したり、転がしたりして楽しんでいます。また、保育者が立方体型に組み合わせたブロックを用意すると、それをお尻に敷いて動かし、あちらこちら移動を楽しむ姿も見られます。

梅雨が近づき、外遊びの機会が減ってきたことから、保育者は、子どもたちが室内で楽しく遊びながら体を動かせるようにと、ある遊び場を設定しました。

最初の遊び場は、登りと下りのある〝お山〟です。厚みが８㎝ある折りたたみマットを細長い木箱に被せると、マットのつなぎ目が木箱に沿って折れ曲がり、マットの〝お山〟ができました。木箱の上部は平面、その両端に斜面ができます。数名の子どもたちが登れるように、保育者は〝お山〟を横向きに配置しました。

〝お山〟ができると、子どもたちは、手前にある登りの斜面を我先にと歩いたり、四つ這いで登り始めたりします。高い所を目指し登って行く途中で後戻りする子もいます。そんな時は、〝お山〟の下まで戻り、踏ん張りながらゆっくりと登っていきます。

上った先は、平面になっていますので、キョロキョロしながら周りを見て高さを味わったり、ニコニコして保育者に手を振ったりする子がいます。高い所が気に入り満足しているのか、両手を上げてジャンプを始める姿も見られます。

一方、すぐに目の前の斜面を下りる子もいます。滑り台をイメージしているのか、お尻で滑る、背中で滑る、腹ばいになって頭から滑るなど様々な姿が見られます。滑ったあとには、保育者に抱き止められて嬉しそうな子もいます。他にも、歩いたり走ったりして下り、スピード感を楽しんでる子もいます。

下り終えると、再び登り斜面まで戻り、マットに体を任せて、登り下りする多様な動きや感覚を面白がり楽しんでいます。

「今度は、トンネルだよ」と、保育者は段ボールのトンネルを子どもたちに見せました。冷蔵庫の段ボールを２箱つないだ長いトンネルと１箱だけの短いトンネルです。待ち時間をなくしたり、好きな方を選んで遊べたりするように２つ用意しました。

トンネルが置かれると、子どもたちは好きなトンネルの入口に向かいます。体をすぼめ、素早くくぐり抜けるのはＡちゃん。短いトンネル、長いトンネルを行ったり来たりしています。長いトンネルの中で競争をしているのはＢちゃんとＣちゃん。膝を付き、四つ這いになって肘や膝を素早く動かして前に進んでいます。短いトンネルでも、隣に並んで競争を繰り返しています。腕や膝をゆっくり動かしながら自分のペースでゆっくり這っているＤちゃんは、トンネルの出口で保育者を探します。保育者を見つけると笑顔になります。保育者も笑顔で「トンネル、出たね」とハイタッチで応えます。

トンネルの左右の壁や天井には丸い穴が空いています。保育者が「何ができるかな？」と、呼びかけながらトンネルの入口と出口をふさぐと、大きな『ポットン落とし』の箱に変身しました。子どもたちが大好きな『ポットン落とし』です。「ポットンするよ」と、保育者がボールを穴に落として見せると、子どもたちは、「わぁー」と嬉しそうな声をあげ、真似してボールを掴んで落とし始めます。

１つだけ掴んで落としたり、両手で掴んで、片方ずつ落としたりしています。落ちたボールの行方を穴からのぞいている子もいます。体をかがめて低い穴に入れたり、伸びあがって高い所にある穴に入れたりしながら『ポットン落とし』に夢中です。ボールが入らない小さな穴もあります。そんな時は、ボールが入る穴を探して入れます。穴が見つかってボールが入ると、入ったことを伝えるように保育者を見て笑顔になります。保育者も「ポットンしたね」と手を叩いて一緒に喜びます。

山の登り下り、トンネルくぐり、『ポットン落とし』、子どもたちは休む間もないほど体を動かしています。〝お山〟、トンネル、『ポットン落とし』は、お気に入りの遊び場になりそうです。

ダンボールトンネルの穴から
ボールを「ポットン！」と落とす。

段ボールのトンネル。出口に向かって、這う、くぐる、競争する。

マットに斜面ができると、登る、
お尻で滑る、背中で滑る。

折りたたみマットの下へ細長い木箱を
おくと、平地と斜面ができる。

組み合わせたブロックの固まりに
お尻を乗せて引いて遊ぶ。

事例から見られる１０の姿の育ち
健康な心と体

子どもたちは、傾斜のある所を登り下りする、トンネルをくぐる、ボールを掴んで落とすなど、保育者によって構成された環境で、体の様々な動きや姿勢を伴う遊びに好奇心をもち、繰り返し楽しんでいる。全身を使う遊びに心地よさや喜びを感じるとともに、思い通りに体を動かす楽しさを感じていると思われる。

子どもたちは、一人で遊んだり、友達や保育者と一緒に遊んだりする中で、伸び伸びと体を動かし、斜面、トンネルなど多様な環境に合わせて、様々な身体の動きを獲得していく。

事例から見られる１０の姿の育ち
自立心

子どもたちは、信頼する保育者の「やったね」「できたね」の声に支えられながら、用意された〝お山〟やトンネルの遊びに興味や関心をもち、それらのもの全てに自分から触れ、繰り返し遊んでいる。また、保育者が箱の穴にボールを入れる遊びを見て、「自分でしてみよう」「自分もやりたい」とボールを穴に落とし始める。

遊び方に不安を見せる子どもも保育者の「大丈夫、ここにいるよ」の言葉や表情に安心して、自ら体を動かし、「やったぁ」と笑顔を見せる。

こうした保育者の関わりは、子どもの行動範囲を広げ、身体や運動の機能を高めるとともに、人やものとの関わりをさらに広げていく。

健康な心と体・自立心
保育者の援助と環境構成のポイント

- **様々な身体の動きを十分に楽しめる用具の環境構成**
  （登り下りする〝お山〟、長さの異なるトンネル、ボールを穴から落とす『ポットン落とし』）
- **待つことなく遊べるようにサイズや数に配慮した用具の設置**
- **子どもが安心して遊びに向かう保育者の存在**
  （運動遊びの達成感や楽しさを共有したり、不安に寄り添ったりする保育者の存在）

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
「10の姿」

- 自立心
- 健康な心と体
- 思考力の芽生え
- 社会生活との関わり

幼保連携型認定こども園における生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活を作りだすようになる。